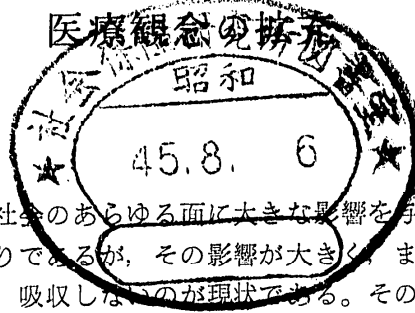




東 畑 精 一

経済の高度成長は、日本の社会のあらゆる面に大きな影響を与えている。社会の構造にも、ものごとの考え方についても然りであるが、その影響が大きく、またあまりにも急速なので、それぞれの部門で、それを消化し、吸収しないうのが現状である。そのため多くのヒズミとか、チグハグが日本社会の中に渦まいている。

たとえば、農業を見ても、伝統的なものの見方がおおいにぐらついている。農業のあらゆる生産財は、いまでは農民が自給するのではなくて、他産業から購入するありさまで、農業の国民経済的関連は戦前に比べて面目を一新した。また、畜産業は以前のように野草を飼料とするのではなく、飼料自身を農業の生産物となし、人間の食物はいわば間接生産の対象とさえなった。農業はいまでは立体的構造のものとなり、旧態依然たる農業観から蟬脱しなくては、立派な農政もでき得なくなる。

同じような場合に医療がある。医療とは何ぞや。病気とそれから恢復とは何ぞや。こういう質問に対する答えも伝統的な観念では全きを得ない。怪我をして治療を受けて治してもらった、歯痛を止めてもらった、というような場合は、ことははなはだ簡単であるが、しかし、もっと内科的、神経的な病気の場合になると、いろいろ問題がある。そもそも、その当人の「病気」前の「健康」からして検討しなければならない。多くの場合に医療と見られるのは、当人が病気と自覚した直前の状態に単純に復元するぐらいとなされる。そして重要な点は、この直前の状態そのものが医療的に検討されないで終ることであろう。病人は治療を受けて治療前の状態に復元しても、病弱であったりして、一人前の勤労生活にたえないことしばしばである。医療がここで止まる限り、それは健康体そのものを創り出すという課題から離れているとなしう。

ある人が病気にかからないようにするのも医学(医療)であるとして予防医学が生れたのは従来の医学を拡充した進歩であるが、病気を治してしまう以外に、より善き心身を創り出すような意味での「予後」医学はあまり語られていないが、そういう方面の医療的開拓がいっそう必要なのではないか。

経済学の通有の概念に flow と stock とがある。前者はたとえば年々の労働の支出とか所得とかを指している。いわば年々の流れであるが、後者はそのいわば蓄積されたもの、源本ともいうべきものである。医療についてこれをいうなら、いわゆる病気を治すというのは医療上の flow を生むことであり、当人の健康体そのものをより善くするのは stock を構成するようなものであり、後者がより強く、より大きくなるに従って前者は逆にその必要が少いものとなってくる。そうなるためには保健とか栄養や生活指導とか社会復帰とかが、医療のなかに採り入れられ、総合されてくるのが必要と思われる。病気を治すだけではない国民の健康体を創るのが医療本来の課題でなくてはならぬ。

なぜこんなことをいうか。日本の新経済計画によると、きたるべき6ヵ年間に年々実質10.6%の成長を、年々1.1%しか増さぬ労働力で達成しようとするのである。今日の勤労とは質的に異なるものをもってしなければ、この任にたえない。日本の医療はこの意味で新たな課題に面しているわけで、これを果さなければ医療は経済成長の重要な担い手たるを得なくなるであろう。